

ホールデン・コールフィールドの語りにおける欺瞞

持 留 浩 二

〔抄 録〕

本論文は、J・D・サリンジャーの代表作『ライ麦畑でつかまえて』の主人公ホールデン・コールフィールドの語りに見られる欺瞞について、そのメカニズムを明らかにしている。この作品はいわゆる一人称小説であり、主人公ホールデンの視点から物語が語られる。この作品は純粹無垢なホールデンが社会にあふれる欺瞞を暴く物語であると捉えられてきた。無垢な主人公の視点から様々な現象を見ることによって、社会の欺瞞が浮き彫りにされるのである。しかし欺瞞は人間性の一部であり、ホールデン自身も欺瞞を持っている。ホールデンが無垢な人間の代表であり、彼の周りの俗物たちが欺瞞に満ちているという理解は正しいものではない。

サリンジャーの作品には「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」という二つのタイプの登場人物が現れる。「繊細なアウトサイダー」の代表であるホールデンは様々な俗物たちを批判するのであるが、必ずと言っていいほど、俗物たちを批判した後であからさまなほどにフェアな態度を見せる。このあからさまなフェアな態度には欺瞞が隠されている。本論文では、サリーやアントリーニ先生とのやりとりを取り上げ、彼の語りの中で自己欺瞞がうまく機能しているメカニズムを明らかにしている。

最後に、我々が自己を含む様々な物事を認識する時に、正しい認識と欺瞞とのどちらを優先させるのかということについて考察している。おそらくピンカーが言うように、外的な物理的世界については、正確な認識を必要とし、自己認識については、自己欺瞞が助けとなる場合が多々あるのであろう。我々はこの二つのバランスをとって社会の中でうまく適応しているのだ。

キーワード 語り、自己欺瞞、進化心理学、サリンジャー、『ライ麦畑でつかまえて』

序

サリンジャー（J. D. Salinger）は、その作品の中で主に若者を描いているが、その代表作『ライ麦畑でつかまえて』（*The Catcher in the Rye*）は永遠の若者のバイブルとも言うべきアメリカ文学を代表する作品である。この作品はいわゆる一人称小説であり、主人公ホールデン・コールフィールドの視点から物語が語られる。この作品は純粹無垢なホールデンが社会にあふれる欺瞞を暴く物語であると捉えられてきた。無垢な主人公の視点から様々な現象を見ることによって、社会の欺瞞が浮き彫りにされるのである。

しかしここで疑問が生じる。完全に無垢な人間などいるのだろうか。欺瞞は一部のみに見られるものなのだろうか。おそらくそうではなく、欺瞞は人間性の一部だと考える方が理にかなっている。実際に現在人間性に関してかなりの説得力を持つ学問分野である進化心理学は、欺瞞は人間性の一部であると断言している。本論で取り上げるが、それよりはるか以前にフロイト（Sigmund Freud）は欺瞞が人間一般に広く見られることを指摘していた。

そうであれば、ホールデンが無垢な存在であり、彼の周りの俗物たちが欺瞞に満ちているという構造は現実的なものではない。本論文では、ホールデンもまた欺瞞を免れてはいないという前提に立ち、彼の語りにおける欺瞞について進化心理学的観点から論じている。まず、『ライ麦畑』の語り特徴をまとめている。さらに脳科学者ラマチャンドラン（V. S. Ramachandran）の洞察をもとに欺瞞のメカニズムを明らかにし、ホールデンの語りの中でそれがいかに機能しているかを論証している。具体的には、サリーに対する態度と、アントリーニ先生に対する態度を取り上げている。そして最後に自己欺瞞とは何なのか、それは正しい自己認識とどう関連しているのか、なぜ自己欺瞞は人間性の必要不可欠な一部となったのかについて考察する。

I 「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」

『ライ麦畑』において、かなり読者を悩ませる描写の一つは、エンディングにおけるホールデンの言葉である。この作品は、ホールデンがクリスマスの時期の数日間にニューヨークの街を放浪したことを思い返しながら語るという物語の構造になっている。そしてそのエンディングでホールデンは、それまで語ってきたことについて自分がどう感じているかを次のように語るのである。

...D. B. asked me what I thought about all this stuff I just finished telling you about. I didn't know what the hell to say. If you want to know the truth, I don't *know* what I think about it. I'm sorry I told so many people about it. About all I know is, I sort

of miss everybody I told about. Even old Stradlater and Ackley, for instance. I think I even miss that goddam Maurice. Don't ever tell anybody anything. If you do, you start missing everybody. (276-277)

D・Bは僕が今ちょうど語り終えたことについて僕がどう思っているのか尋ねた。どう答えていいのかさっぱり分からなかった。正直に言うけど、どう思うかなんて僕にも分らない。その話をたくさんの人にすることを後悔してるんだ。僕に分かっていることは、僕が話した全ての人がここになくて何となく寂しいってことだけ。例えばストラドレーターやアクリーのことだよ。あのひどいモーリスの野郎でさえ、いなくて寂しいと感じるんだ。誰にも何も話しちゃダメだよ。話すとみんながいなくて寂しく感じ始めるんだから。

最初『ライ麦畑』を読んだ時、このホールデンの言葉をどう受け取っていいのか、随分考えさせられたものである。アクリー、ストラドレーター、そしてモーリスといった登場人物は、それまでホールデンが「俗物」として批判し、嫌悪してきた連中である。アクリーはただの不潔で無能な少年で、ストラドレーターはただの女ったらしだから、それほど嫌悪すべき相手ではないとしても、モーリスは未成年の少女の売春を斡旋しており、ホールデンが英雄視する「ライ麦畑の捕らえ人」(“the catcher in the rye”)から見て、子供たちを搾取する悪い大人の代表ではないかと思われる。実際モーリスがホールデンに斡旋したサニーは未成年の少女であった。それらを物語のエンディングで「いなくて寂しい」という肯定的なものとして評価し直しているのである。私に限らず多くの読者がこの描写に当惑を感じるはずだ。

以前フロイトやユング(C. G. Jung)の心理学の助けを借りてこの作品を解釈していた時には、私はこのホールデンの言葉を、「大人へと成熟したことを示す証」のようなものとして受け取っていた。大人へと自立することに成功し、考え方も成熟し、その結果ホールデンは、今まで許せなかった「俗物たち」をより寛大に受け入れることが出来るようになったのだと考えたのだ。そう考えながらも、一方では完全に納得できない部分も感じていた。それは、なぜここで解決されたはずの「俗物たちへの嫌悪」がこの作品発表後も繰り返しサリンジャーの作品の中に現れ続けるのかということだった。

『ライ麦畑』はサリンジャーにとって最も成功した作品だった。この作品で彼は一躍スター作家の仲間入りを果たした。富と名声を手にした彼は、この後一連の「グラス・サーガ」と呼ばれるグラス家の人々に関する物語群を発表する。グラス家の子供たちが抱えている問題は、ホールデンが抱えていた問題と似ている。かつてハッサン(Ihab Hassan)は、サリンジャーの作品に描かれているのは「繊細なアウトサイダー」(“the Responsive Outsider”)と「自信たっぷりの俗物」(“the Assertive Vulgarian”)との対立であると指摘したが、『ライ麦畑』でホールデンを悩ませたのもこの二者の対立である(Hassan 139-140)。もちろんホールデンは「繊細なアウトサイダー」側におり、彼を悩ませる俗物たちとの和解の道を探る。そしてもし、

先程私が述べたようにホールデンが大人へと成熟し、この二者の和解を果たしたのだとすれば、その後の「グラス・サーガ」においてこのテーマが繰り返し現われてくることをどう捉えればいいのかであろうか。ここで一つの可能性が浮かんでくる。実は先程引用したホールデンの言葉は、「自信たっぷりの俗物」と「繊細なアウトサイダー」の和解を意味するものではないのかもしれない。そうであれば、この二者の問題は未解決なままということであるから、このテーマがこの後もずっとサリンジャーの作品の中で取り上げられ続けることにも納得がいく。

「自信たっぷりの俗物」と「繊細なアウトサイダー」の対立をどう克服するかというのは、サリンジャー自身の人生にとっても大きなテーマであったと考えられる。彼は、作家としての成功後、偏執的なまでに自らのプライバシーを守ることに腐心したが、俗物たちへの嫌悪は終生彼の心に巣食っていた。彼はニューヨークの大都会を離れ、ニューハンプシャーの田舎町で家の周りに高い塀を張り巡らせて隠遁生活を続けた。おそらくサリンジャーはこの二者の和解を模索すべく自らの作品の中でこの二者の対立を描いたのだ。その対立を和解させるために彼は『ライ麦畑』までの前期の作品群の中に「繊細なアウトサイダー」を代表する三人の主人公を登場させている。シーモア、テディー、そしてホールデンだ。

シーモアの苦闘は、サリンジャーファンの中で『ライ麦畑』と並ぶくらい人気のある「バナナフィッシュにうってつけの日」(“A Perfect Day for Bananafish”)に描かれている。主人公シーモアは「繊細なアウトサイダー」の代表者で、彼の妻やその母親は代表的な俗物たちだ。シーモアの妻ミュリエルと彼女の母親との電話での会話がこの物語の前半部分を占めているが、その中でいかにシーモアが奇行ばかりを繰り返している危なっかしい人物であるかが繰り返し語られる。そして物語のエンディングでは、この誰にも理解されない孤高の天才、「繊細なアウトサイダー」を代表するシーモアはピストル自殺を遂げる。自殺という結末はこの二者、「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」の和解が決裂したことを意味している。

次にシーモアの幼少期と言えるテディーという人物が登場する。彼は短編集『ナインストーリーズ』(Nine Stories)に収められている短編「テディー」(“Teddy”)の主人公である。テディーはピストル自殺をしたシーモアが幼少期の姿を借りて再び姿を現わした人物と言って間違いない。というのも、『ライ麦畑』の発表後にサリンジャーが取り組んだ「グラス・サーガ」に出てくる幼少期のシーモアとそっくりの早熟の天才だからだ。テディーは幼少期シーモアのプロトタイプなのだ。テディーもやはり「繊細なアウトサイダー」の代表として、「自信たっぷりの俗物」といかに接するべきかで苦しむ。彼もシーモアと同じ孤高の天才であり、周囲から理解されることはない。その孤独の中で彼はこの二者の和解のための犠牲とも言える死を遂げる。シーモアが完全な自殺であったのに対し、テディーの死は自殺とは少し違っている。彼には予知能力があり、自分がその日に死ぬということが分かっていた。にもかかわらず、彼はその運命を避けようとしなかったのである。広い意味では自殺ともとれる死であるが、シーモアの自殺が完全にネガティブな印象を与えるのに対し、テディーの死は、自らそう選んだとい

う点でポジティブな印象を与える。

そして次にホールデンであるが、ホールデンもこの二者の和解を模索する。ただホールデンという人物はシーモアやテディーと違い、純粋な精神性の求道者ではない。彼は天才でもなければ、宗教的に高みに達した人間でもない。「繊細なアウトサイダー」の代表者ではあるが、俗物的な部分もかなり持ち併せている。彼も二者の板挟みの中で苦しみ、物語のエンディング付近では死の影につきまとわれ、自分の存在が消えてなくなるのではないかという強迫観念に支配されてしまう。さらに自殺行為とも言える、西部へのたった一人の逃亡の計画を立てる。しかしながら結局彼は生き延びる。おそらくシーモアやテディーとは違い、何らかの解決策を見出したからこそホールデンは生き延びたのだろう。私はそれは不可能性の受容であると考えた。つまり自分に出来ないことがあることを受け入れることである。

ホールデンは、作品の中で、自分がなりたいのは「ライ麦畑の捕らえ人」であると言う。無垢な世界の中にいる子供たちを外の俗悪な世界から守るのが「ライ麦畑の捕らえ人」の英雄である。でもそんなことは不可能だ。子供を永遠に無垢な世界に閉じ込めておくことは不可能であるし、正しいことでもない。学校の壁に彫り込まれた卑猥な落書きや最愛の妹フィービーの反抗からホールデンも徐々にそのことに気づいていく。そしてようやく自分には不可能なことがあることを学ぶ。子供から大人への成熟にはこの不可能性の受容が大きな役割を果たすと私は考えている。

それで本論文の冒頭に引用した、エンディングでの描写につながっていくのである。さてあの描写はホールデンの成長の証なのだろうか、それとも何か他の役割を持ったものなのだろうか。私は後者ではないかと考えている。そう考えると、サリンジャーがこの作品後にも何度も「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」との対立を描き続けることにも納得がいく。つまり『ライ麦畑』では問題は解決されたわけではなかったのだ。「繊細なアウトサイダー」を代表するシーモア、テディー、そしてホールデンが描かれた作品を時系列的に並べると、シーモア、ホールデン、そしてテディーという順序になる。もし先程述べたように、シーモアとテディーの物語を「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」の和解の失敗、ホールデンの物語をその成功として見ると、やはりつじつまが合わない。シーモアで失敗し、ホールデンで成功し、再びテディーで失敗するという流れは不自然だ。やはり『ライ麦畑』で問題は解決されなかったと捉える方が自然なのである。

II ホールデンの語りと自己欺瞞

『ライ麦畑』は一人称の語りによる物語である。ホールデンによる一人称の語りは、この作品を成功に導いた大きな要因の一つである。彼の語りには読者を誘導する独特な力がある。我々は彼の目を通して世界を見ることによって、世界が「インチキ」(“phony”)なもので満

たされていることに気づき、インチキな大人の世界を嫌悪するようになっていく。そこで読者の態度は二つに分かれる。ホールデンの語りを全て正当なものとして受け入れるか、もしくは、その語りに疑問を抱き反発するかである。おそらく多くのホールデンと同じような年齢の若者は彼の言い分を受け入れ、思春期を過ぎた大人たちは彼の語りにある種の欺瞞を読み取るのではないだろうか。

そもそも語りとは小説の中だけにあるものではない。人はみな語ることによってコミュニケーションをとる。人間は社会的動物であり、社会に適応するためには自分の語りが信用できるものとして、周囲から真剣に受け取られる必要がある。サリンジャーの作品においても、主人公たちの語りを説得力あるものにさせることに貢献している様々な特徴が見てとれる。

一つは自己欺瞞である。『ライ麦畑』の主人公ホールデンは、自分の考えが正しいということアピールするために、かなり独善的に事実を歪曲して自分の正当性を主張する。この後で取り上げるが、ガールフレンドのサリーや恩師アントリーニへの言及にはそれが顕著に見られる。どう考えてもサリーやアントリーニの主張が正しく思えるのであるが、ホールデンは、自己正当化に躍起になるあまり、自らの欺瞞の中に逃げ込んでしまう。自己欺瞞は人間の本能の一つであるが、ホールデンも無意識的に欺瞞の中に逃げ込んでしまう。

もう一つは他人を批判した後に来る不自然なほどあからさまなフェアな態度である。自己欺瞞が無意識的であるのに対して、こちらはより意識的に行われている。これは一般的にもよく用いられているテクニックではないだろうか。誰かに対して批判的なことを言った後、その人の良い面を付け足す。そうすることによって、自分は決して一方的に批判しているのではなく、対象をフェアに見ているのだということをおアピールするのである。

自己欺瞞は人間性の一部である。自己欺瞞が起こるメカニズムは脳科学者ラマチャンドランの『脳の中の幽霊』(*Phantoms in the Brain*) に詳しく説明されている。

我々が目覚めている時、大量の感覚入力脳に集中するのであるが、それらの情報は我々の頭の中にある「信念体系」の全体像の中に組み込まれていくことになる。「信念体系」を世界観と言い換えてもいい。我々はそのようにして自らの世界観をたくましくしていく。『ライ麦畑』の中で例を挙げると、ホールデンは妹フィービーが従順な兄想いの妹であるという信念を持っていたが、物語のエンディング付近でそうではないことに気づかされる。フィービーはその時初めて兄ホールデンに反抗するのである。家出をして西部へと行くと言うホールデンに対し、フィービーは自分も家出をし、学校もやめてホールデンについて行くと言う。馬鹿なことをやめるよう説得するホールデンに対して、ホールデンが好き勝手な行動をとるなら自分だって好き勝手に行動するのだと、ホールデンの言うことを聞かないのである。ここで今までの従順なフィービー像とは違ったフィービーの姿を目にし、ホールデンはそれまでのフィービー像を修正せざるをえなくなる。「脳は、一貫した行動を起こすために、過剰な細々としたことのつじつまをうまく合わせ、それを安定的かつ内的に一貫した『信念体系』に秩序立てる何らか

の方法を持たなければならない、それは手元にある証拠を意味あるものにする物語と言ってもいいようなものである」とラマチャンドランは言う(134)。

それまでの「信念体系」に当てはまらないことが感覚から入ってきた時、それへの対処方法として二つのやり方がある。一つ目は、今までの「信念体系」を全て放棄して初めから構築し直すという方法である。しかしこれだと脅威となる情報が入ってくる度に大きな混乱が生じ「信念体系」が不安定になる。さっきのフィービーの例で言えば、フィービーがホールデンの期待に背く度に新しいフィービー像を作り直すというやり方は負担が大きすぎる。時間とエネルギーがかかりすぎるのである。二つ目は、我々の脳が実際にとっている方法なのであるが、脅威となる情報を無視するか、あるいはそれをねじ曲げて、すでにある体系の中に無理に押し込んで安定を保つというやり方である。これはフロイト的な防衛の全て(否認、抑圧、作り話、その他もろもろの自己欺瞞)の背後にある原理であるとラマチャンドランは言う。

心理的防衛が精神状態を安定させる上で極めて重要な役割を果たすことを指摘したのはフロイトの功績であったのだが、ラマチャンドランは、「幻肢」の問題に取り組んだ際に、患者が示す奇妙な反応を見て、まさにフロイトの言った否認のメカニズムがありありとそこに見て取れることに気づいた。「幻肢」とは、戦争や事故で手足を切断してしまった人が、手足の切断後もその感覚を持ち続けるという奇妙な現象である。ラマチャンドランは、この「幻肢」の現象から脳に関する多くの洞察を得ている。

「幻肢」の感覚を持ち続ける患者には、フロイトが問題にした心理的防衛の例がやすやすと見てとれる。ジグムント・フロイトと娘のアンナ・フロイト(Anna Freud)が作った様々なタイプの自己欺瞞のリストがある。フロイトのリストには次の六つのもが含まれている。一つ目は「否認」(“Denial”)で、これは完全な否認である。切断されて腕がない患者が「腕はちゃんと動いています」と言う現象がこれに当てはまる。二つ目は「抑圧」(“Repression”)である。患者は、何度も聞くと、実は麻痺していることを認めるのであるが、すぐにまた否認する。三つ目は「反動形成」(“Reaction Formation”)で、これは自分自身について、本当はこうではないかと疑っていることの反対を主張する傾向のことである。左手が麻痺しているある女性が、大きな机を持ち上げるように言われ、右手では1インチ持ち上げられるが、左手の方は右手よりも強いので1インチ半持ち上げられると答えた例をラマチャンドランは紹介している。四つ目は「合理化」(“Rationalization”)であり、これは無理矢理つじつまを合わせることである。切断された腕がまだ存在すると主張する患者に対して「腕を動かしてください」と依頼すると、患者は「先生、関節炎が痛いので手を動かすのはやめておきます」と言うのだ。五つ目は「ユーモア」(“Humor”)で、最後の六つ目が「投影」(“Projection”)である。これは都合良く誰か他の人のせいにするものである。例えば、麻痺した自分の手を正常であると思いついて患者に対して、「ではその麻痺した手は誰の手ですか」と質問すると、「この麻痺した手は兄の手です」と患者は答える(Ramachandran 153-154)。

これは幻肢の患者に顕著に見られるものではあるが、程度の差こそあれ我々一般に見られる心理的防衛でもある。我々は、自分の「信念体系」に合わないものを目にした時、それと「信念体系」とのつじつま合わせのために、上の六つの自己欺瞞に頼るのである。

また、進化心理学者のトリヴァース（Robert L. Trivers）は、自己欺瞞が進化したのは、確信を持って嘘をつくためという説を提唱している。嘘は、仕事の場や異性のパートナーとのコミュニケーションを潤滑にする上で大きな役割を果たす。うまく嘘をつくことが難しいのは、脳が顔の筋肉をひきつらせ嘘の印を暴露してしまうからだ。しかしもし自分が自分の嘘を本当のことだと信じ込むことができれば、表情から嘘がばれにくくなる。そのように自己欺瞞が生まれたのだとトリヴァースは言う。

サリンジャーの作品における、他人を批判した後に来る不自然なほどあからさまなフェアな言葉は、「繊細なアウトサイダー」である主人公の自己欺瞞だとは考えられないだろうか。先程のフロイトによるタイプ別で言うと、三つ目の反動形成に当たるかもしれない。他人を強く批判した後に、ホールデンは、自分がやや独善的に過ぎ、このままでは語り手として読者に信用されなくなるかもしれないと感じていたはずだ。それでなくても、ホールデンは「信用できない語り手」の典型なのである。それで、それまでは批判してきた人物をあえて肯定するようなコメントをする。そうすることによって、再び読者の信用を手にすることが出来るのである。

では実際に作品の中からその例を取り上げてみよう。『ライ麦畑』の中では、冒頭に引用した場面の他に、サリーに対する気持ちを吐露する場面でやはり不自然なほどあからさまなフェアな態度が見られる。

サリーはホールデンと同年代の魅力的な女の子で、ホールデンは彼女を女性としてとても魅力的だと感じている。学校を退学となり、全とうまく行かず、この世の中に嫌気が差したホールデンはサリーと会った時に一緒に駆け落ちしてくれとお願いする。サリーは当然ホールデンの頼みを拒絶する。彼女はホールデンと違って、この世界に嫌気が差しているわけではない。それどころかうまく適応しているように見える。しかも彼女はホールデンのことを深く愛しているわけでもない。彼の頼みを聞いてくれると考える方がどうかしている。

サリーに拒絶された後、ホールデンもそのことに気づいたはずだ。それで自分があの時に一時的に頭がおかしくなっていたこと、でも今は正常であることを主張するために以下のように言う。

I probably wouldn't've taken her even if she'd wanted to go with me. She wouldn't have been anybody to go with. The terrible part, though, is that I meant it when I asked her. That's the terrible part. I swear to God I'm a madman. (174)

もしかりに彼女が僕と一緒にいきたいって言ったとしても、僕はたぶん連れて行かなかっただろうね。彼女だけは連れて行こうとは思わなかっただろうな。でも何がひどいかって

いうと、彼女を誘ったときは本気で連れて行きたいって思ってたんだ。本当にひどい話だよ。間違いなく僕は頭がおかしいんだよ。

このホールデンの言葉はどう解釈すればいいのだろうか。もっと言うと、なぜここでこういう言い訳をする必要があるのだろうか。答えは先ほども言ったとおり、自分の語りの説得力を維持するためである。ホールデンの語りはこの作品の生命線だ。その語りに説得力がなくなり、彼が信用できない語り手だと読者に受けとられてしまうと、作品自体が成立しなくなる。それで自分があの時に一時的に頭がおかしくなっていたこと、でも今は正常であることを主張するために上の引用箇所に見られるような言い訳をしているのだ。

もう一カ所、物語の後半においてアントリーニと会う場面の後で、それを振り返るホールデンの語りにやはり不自然なほどあからさまなフェアな態度が見られる。ホールデンは、夜中に行き場所を失ってしまい、恩師であるアントリーニに会いに行く。アントリーニは親切にもホールデンを自宅に泊めてやり、行き場所を失い生きる目的を失っているホールデンに素晴らしいアドバイスをする。「未熟な人間の特徴は、理想のために気高く死にたいと思うところがあり、逆に成熟した人間の特徴は、理想のためにつつましく生きようと思うところにある」というある精神分析学者の言葉を彼は紹介している(244-245)。この言葉はホールデンに訴えたはずだ。まさにそれがエンディングにおいて彼が辿り着いた境地なのだから。

アントリーニの家で疲れて眠りについたホールデンだったが、夜中に目を覚ましてかなり動揺してしまう。アントリーニが眠っているホールデンの頭を撫でていたからだ。ホールデンはすぐさまそれが同性愛的な変態行為であると判断し、アントリーニの家を飛び出してしまう。そしてその後、そのことについて以下のような考えを巡らせる。

I mean I wondered if just maybe I was wrong about thinking he was making a flitty pass at me. I wondered if maybe he just liked to pat guys on the head when they're asleep. I mean how can you tell about that stuff for sure? You can't. I even started wondering if maybe I should've got my bags and gone back to his house, the way I'd said I would. (253)

先生が僕にホモがやるようないやらしいことをしていたって考えたことが間違っていたのかもしれないって思ったんだ。もしかすると、先生はただ眠っている男の子の頭をなでるのが好きなだけだったのかもしれない。そういうことって間違いなく見分けられるわけないじゃないか。絶対無理だよ。すぐにもカバンを持って先生の家に戻るべきじゃないかってふうにさえ思い始めたんだ。さっきも言ったようにね。

このホールデンの言葉もやはり自らの語りの説得力を維持するための、読者に対する言い訳

のようなものだと考えられる。ホールデンはアントリーニをホモの変態だと決めつけるのであるが、この場面でそう決めつけるのはかなり無理がある。ホールデンが自ら言っているように、アントリーニはただホールデンの頭を撫でていただけだし、その時アントリーニの家には彼の妻もいたのである。ここでのホールデンの反応は不自然なほどに敏感すぎる。おそらく読者の多くがそのように感じたのではないだろうか。そこでホールデンは、自らの反応が過敏であったことを認め、フェアな態度を見せたのだろう。

今まで見てきたように、語り手ホールデンは自分の語りが読者に真剣に受けとられるために様々な工夫をする。少々偏った主張をした時には、その直後でその主張とバランスをとるようなフェアな態度を見せるのだ。

III 正しい自己認識か、それとも自己欺瞞か

欺瞞という言葉には否定的な意味合いが強く含まれている。自己欺瞞というと、自分で自分自身を欺くわけだから、やはり我々はそこから否定的な印象を受けてしまう。しかし進化心理学者のピンカー（Steven Pinker）やトリヴァースが言うように、自己欺瞞は我々人間が進化によって獲得した能力なのだ。ホールデンが人一倍この能力に長けているからといって、それを非難するのは人間の進化を否定することと同じだ。

自己欺瞞を道徳的な是非の観点から判断することにあまり意味はない。自然や生物は道徳的な善悪によって進化してきたわけではない。生物はむしろそんなことには無関心であった。進化論的観点から見れば、この世界でいかに生き残るか、つまりいかに周囲の環境に適応できるかということの方がはるかに重要なのだ。生き残れないもの、異性のパートナーを見つけ子孫を残せなかったものは淘汰され、その遺伝情報が後世に伝えられることはない。生き残ってきた生物は、適応のために必要な遺伝情報を持った遺伝子を持っているのだ。「ホールデンは、無垢な若者ではなく、無垢なふりをしている自己欺瞞に満ちた若者である」という主張がなされたとしても、ホールデンの価値が損なわれるわけではないのである。

トリヴァースは、自己欺瞞が、自らの欺瞞を他人にさとられないように確信を持って嘘をつくために進化したのだと考えた。では、正しい自己認識と自己欺瞞ではどちらが適応において有利に働くのだろうか。トリヴァース以前は、自然淘汰は正確な世界のイメージを作り出す神経系を求めるはずだという見解が優勢であった。だがトリヴァースはこれに真っ向から反対し、自己欺瞞こそが適応にプラスに働くのだと指摘している（Trivers xx）。これについて、進化心理学者のピンカーは『人間の本性を考える』（*The Blank Slate*）の中で、誤った認識が認識者本人にとって有害となりやすい物理的世界については、自然淘汰は正確な世界のイメージを作り出す神経系を求めるはずだという従来の見解が概ね正しいかもしれないと認めた上で、「しかしトリヴァースが言うように、自己についてはそれ（従来の見解）は正しくないのかも

しれない、自己には他人が出来ない方法でアクセスできるわけだし、そこでは間違った認識が助けとなる場合もあるからである」と言っている(264)。

親は子供を自分たちにとって理想的な大人に育てようとし、子供はそんな親に反抗する。恋人は互いに永遠の愛を誓う。教師は、本音とたてまえを承知の上でたてまえの世界について教える。政治家は、実現不可能であることが分かっているが、理想的な社会の実現を選挙で公約する。そこにはある程度の欺瞞が含まれているが、社会がうまく機能するためには欺瞞が必要なのである。

結局のところ我々は、正しい自己認識と自己欺瞞のバランスをとって生活しているのである。我々は自己欺瞞を繰り返しているが、完全に嘘をつくこともできない。嘘をつく、顔が引きつり、声の調子がおかしくなり、発汗量が多くなり、矛盾に足をすくわれてしまう。これは、正しい自己認識と自己欺瞞の両方が必要なのだということを示しているのだとピンカーは言っている(264)。

自己欺瞞とは狡猾さの一種である。その狡猾さはこの世界で生き延びていくには必要なものなのだ。生物が生き残るための方法は一つではない。いくつも道があり、それぞれの個体が自分にとって最も有利な道を選ぶ。かつてサリンジャーの作品が最もよく読まれていた60年代から70年代は、ヒッピー文化など若者中心の文化が花開いた時代であった。この頃に『ライ麦畑』同様に若者のバイブルとなった文学作品や映画や音楽は数多くあった。そんな中で『ライ麦畑』は今もなお読まれ続けている。言い換えれば、今まで生き残ってきた作品なのだ。進化的に言うと、生き残ってきたのには理由があり、読む人にとって何か有益な情報を含んでいるはずである。私は、それは自己欺瞞を含むホールデンの狡猾さではないかと考えている。自らを欺き、他人を誘導していくその語りは、語り手本人が社会で適応する上で大きな武器となる。我々読者はこの物語を読んで、その語りによる誘導の方法や、そういう誘導から自身を守る方法についてを学んでいるのかもしれない。

結論

サリンジャーの作品には「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」という二つのタイプの登場人物たちが現れる。そしてホールデンをはじめ「繊細なアウトサイダー」を代表する主人公たちは「俗物たち」とどう折り合っていくべきなのかを模索する。『ライ麦畑』は主人公ホールデンによる一人称の語り手によって語られる。ホールデンも様々な俗物たちを批判するのであるが、その語りにはある特徴がある。ホールデンは、無垢な人間の代表として、俗物たちを嫌悪し批判するのであるが、必ずと言っていいほど、俗物たちを批判した後にあからさまなほどにフェアな態度を見せる。冒頭で引用した『ライ麦畑』のエンディングに出てくる、今まで「俗物たち」として忌み嫌っていた人々を懐かしむホールデンの言葉はその一例だ。

『ライ麦畑』は、無垢な主人公が欺瞞に満ちた世界によって疲弊させられる物語と解釈されてしまうことが多く、ホールデンはただ無垢な人々の代表であるかのように受け取られがちである。しかし進化心理学者で言われているように、自己欺瞞は人間性の一部なのである。ホールデンの語りの中にも多分に欺瞞が隠されており、サリーやアントリーニとのやりとりにはそれが見てとれる。ホールデンは、うまく欺瞞を利用し自らの語りに説得力を持たせ、読者が自分の味方になるよう誘導していくのである。

第三章では、様々な物事を認識する時に、人は正しい認識と欺瞞とのどちらを優先させているのかという問題を考察した。ホールデンの語りでは自己欺瞞が優先されているように見えるが、外的世界に適応していくには正しい認識も必要はずだ。その答えは、おそらくピンカーの答えが正しくて、外的な物理的世界については、正確な認識を必要とするものの、自己認識については、自己欺瞞が助けとなる場合も多いのであろう。

あらゆる語りが自己欺瞞に満ちているということは、基本的に人と人の相互理解などというものはないということである。つまり人と人は、分かり合うために語り合うわけではない。語りは、真実を伝える行為ではなく、語り手にとって有利な世界を作り出すための行為であり、そこでは欺瞞という武器が使用される。そしてその自分に有利な世界の中で、自分に都合のいいように聞き手を誘導していく。もちろん誘導される側の聞き手も黙って誘導されるままになっているとは考えにくい。語りに隠されたもくろみを暴くべく、心を読み解く能力も同様に進化しているはずだ。文学作品、主に一人称の語りによる物語の中には、そのような語りをめぐる力学のダイナミズムが激しく展開している。そのメカニズムを明らかにすることは人間性をよりよく理解する上で大いに意義のあることである。

引用文献

- Hassan, Ihab. "The Rare Quixotic Gesture." Henry Anatole Grunwald ed. *Salinger : A Critical and Personal Portrait*. New York: Harper & Row, 1962. 138-163.
- Pinker, Steven. *The Blank Slate*. New York: Penguin Books, 2003.
- Ramachandran, V. S. and Sandra Blakeslee, *Phantoms in the Brain*. New York: HarperCollins, 1998.
- Trivers, Robert. Foreword. In Richard Dawkins, *The Selfish Gene*. New York: Oxford University Press, 1976.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown, 1951.

(もちどめ こうじ 英米学科)

2013年11月15日受理